

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第165号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成23年9月21日

チゴハヤブサ



2011. 7. 30 石狩市北生振

撮影者 辻 雅 司 (札幌市北区)



も く じ

イメージとしてのアオサギ

	北海道アオサギ研究会 松長 克利	2
飛ぶものたち	写真家 中島 宏章	8
ムネアカタヒバリ	札幌市東区 大橋 晃	10
恵庭市でアカアシチョウゲンボウ	広 報 部	10
探鳥会ほうこく		11
探鳥会あんない		16
鳥民だより		16

イメージとしてのアオサギ

北海道アオサギ研究会 松長 克利

野付にて

1990年代半ばの一時期を私は道東の標津町で過ごした。当時、標津の町外れには200巣を超えるアオサギのコロニーがあり、そこでアオサギの子育ての様子を観察するのが目的だった。そこから10kmほど南へ下ったところに野付湾がある。湾はホッカイシマエビの漁場となるような浅い水域で、潮が引くと広大な浅瀬が現れる。そうすると、何百というアオサギが一斉に漁を始めるのだ。作者の名を失念したが、「青鷺の 天下となれり 野付湾」という句がある。まさにそういうところだった。

ご存知の通り、野付半島は観光地であり、春から夏にかけて多くの観光客が訪れる。観光シーズンはアオサギの繁殖シーズンでもあるため、観光客がこの壮大な光景を目にするのは多い。ところが、彼らは野付湾を眺めて、「ああ、なんにもいないねえ」と言って落胆して去るのだった。彼らの目的はタンチョウか、そうでなければオジロワシと相場が決まっていた。目の前に何十、何百というアオサギがいるのに、彼らの目にはまるで入ってこないのだ。なんと寂しいことだろう。

そんなことが幾度もあった。そのたびに、なぜこんなにアオサギは人気がないのだろうといつも思った。アオサギはどこにでもいる鳥だからと言う人もいる。けれども、私にはそれだけが理由ではないように思えた。現に、海外に目を移せば、アオサギはその個体数の多さにもかかわらずとても人気のある鳥なのだ。イギリスは1928年から、もうかれこれ80年以上も全国のアオサギコロニーをモニタリングしつづけている。その人気ぶりは、日本で

は想像できないほど多くのアオサギ関連商品が売られていることでも察せられる。アオサギの代替種としてアメリカに生息するオオアオサギの場合も同じで、こちらは本家アオサギに輪をかけて人気が高い。保護活動も各地でとても精力的に行われている。なにしろ、アメリカ最大の鳥類保護団体であるオーデュボン協会のロゴマークからしてオオアオサギなのだ。といって、当地のアオサギ、オオアオサギが希少な鳥だというわけではない。状況は日本のアオサギと似たり寄ったり。特殊な状況があるわけではない。たぶん彼らは単純にアオサギやオオアオサギが好きなのだ。そんなことをあれこれ考えていると、日本人のアオサギに対する関心の低さがますます不思議に思えてくるのだった。

この違いの原因はどこにあるのか。今回ここでは、人々



がアオサギに抱くイメージを、古今東西の神話や宗教、文学などの中から拾い集め、文化的側面からその原因を探っていきたいと思う。

アオサギが神だった頃

今から4000年前の古代エジプト。ラーが太陽神として君臨し、オシリスが冥界を司っていた地で、ベヌウという名の1羽の聖鳥が崇められていた。他の何千という神々と同じく、ベヌウも最初は田舎で崇拜される一地方神にすぎなかった。それが千年、二千年を経て、多くの神々が忘れ去られる中、ベヌウはしなやかに生き続け、最終的にエジプト神話の中でも極めて重要な位置を占めることになったのである。この聖鳥のモチーフになったのがアオサギなのだ。下の絵はラムセス2世の王妃ネフェルタリの墓に描かれた壁画で、頭の後ろに伸びる冠羽といい、側頭の黒のラインといい、アオサギの特徴がよく表れている。



そんなアオサギ神がエジプトで担っていた役割とは何だったのか。ベヌウの名は「上る」とか「輝く」などの語に由来するとされている。ナイルの川面から朝日を浴びて飛び立つアオサギをイメージすれば、これらの語を連想するのは易しい。しかし、「上る」や「輝く」という語でもっともイメージしやすいものは太陽である。このイメージの連鎖により、ベヌウは太陽神ラーと密接に結びつくことになった。両者の関係は、太陽を頭にいただくラーとともにベヌウが「太陽の船」に乗っている場面に象徴されている(右上図)。それだけではない。エジプトの神話では太陽は卵から生まれたことになっており、その卵を温めて孵化させたのが他でもないベヌウだとされているのだ。つまり、ベヌウがいなければ世界は始まらなかったのである。

ところで、このベヌウが頭上にいさぐ重そうな冠、これはアテフ冠と呼ばれるもので、本来、冥界を司る神、オシリスがかぶるものとされている。それをベヌウがかぶるというのは、オシリスとベヌウが同一視されている



ことに他ならない。実際、ベヌウはラーと同様、オシリスとも深く結びついているのである。しかし、なぜ「上る」や「輝く」のイメージをもつアオサギが冥界と関係があるのか。これについてはエジプトの死生観を考えてみる必要がある。エジプトではファラオのような権力者は、死後、ミイラとなって復活を待つことになっている。つまり、エジプトにおいて、死は再生と直結する概念なのだ。ベヌウが象徴する太陽は、一日の終りに西に沈んだ後、翌日、東の空に復活する。これは死と再生のメタファーである。また、アオサギは乾季になりナイルの水が引くとどこかに去り、洪水期になると再び戻ってくる。これも死と再生の暗喩に他ならない。アオサギの季節移動、太陽の運行、死後の復活、要するに、これらは全て「再生」のイメージでくられる同じ出来事なのだ。

ベヌウがオシリスといかに強く結びついていたかは『死者の書』にベヌウがたびたび登場することからも分かる。『死者の書』というのは、死者とともに棺の中に収められるパピルスに書かれた巻物で、そこには死者がオシリスの審判を受け樂園に到達するのに必要な呪文がごとく書かれている。その第83章にベヌウに変身するための呪文がある。英語版のものを訳すとだいたい次のようになる。「我は原初の丘より飛びいでしものなり。我はケベラのごとく来れり。我は植物の如く芽を吹きたり。我は亀の如く甲羅の中に隠れたり。我は全ての神々の種なり。(中略)我は来た。我は玉座に上りたり。我はクーを授けられたり。我は全能なり。我は神々の中で神格を授けられたり。我はケンス、全ての力の王なり」

まあ、このような調子で、訳したところで何を言っているのか分からないのだが、ベヌウが死者に対し大きな影響力をもつ存在だったのは確かなようだ。

つまり、古代エジプトのアオサギは、ベヌウという名の下に、上り、輝き、再生するという、非常にポジティブかつ生命力に溢れたイメージを有する鳥だったのである。そして、このアオサギのイメージは時代を下ってギリシャ、そしてローマへと受け継がれることになる。フェニックスと名前を変えて。

火の鳥の時代

『死者の書』に登場するベヌウは、後代になると、英語ではその名前がフェニックスに変わる。フェニックスをギリシャ世界に最初に紹介したヘロドトスは、その著書『歴史』で、「私はその姿を絵でしか見たことがない」、とその実在性を疑いつつ、その鳥の姿や生態を具体的に書き留めている。それによると、フェニックスの形状はもはやアオサギの面影を留めておらず、むしろタカに近い。そして、その羽毛は金色と赤ということになっている。なぜベヌウ（フェニックス）の姿がアオサギからタカに変化したのか、その理由は定かではない。ただ、『死者の書』について言えば、最初は何巻もの長さをもつ重厚な文書だったものが、年月を経るとともに次第に俗化し、好みの断片を適当につなぎあわせた形だけのものになっていく。間違いが起こる余地はいくらでもあったのだ。『死者の書』には「ベヌウの頭をもつ美しき金色のタカ」という一節がある。アオサギからタカへとイメージが変わったのも、この辺の文章を適当に解釈した結果かもしれない。ただ、そうした間違いやいい加減さが時として文化の多様性を押し広げる重要な要素となっているのも事実なのだ。もし、ギリシャに伝わったフェニックスが、その後もアオサギの姿で飛び回っていたとしたら、現在、我々が知るようなフェニックス伝説は、果たして存在していたかどうか。

ともかく、ギリシャに伝わる頃にはフェニックスはアオサギの原型をほとんど留めないものになってしまった。しかし、ベヌウのもっていたイメージはフェニックスに形を変えた後もしっかりと受け継がれていった。太陽のイメージはフェニックスでは炎のイメージとなって伝承され、再生のイメージは自らを炎で焼いた後、その灰の中から復活するという逸話として語り継がれたのである。

ところで、一度はフェニックスのものとなったこれら



のイメージだが、アオサギのもつ属性として蘇ったことが、その後、ただ一度だけあった。紀元の変わり目に活躍したローマの詩人オヴィディウスは『変身物語』の中で、トロイ戦争当時、Ardeaという町が陥落した場面を次のように描写している。

「異国人の剣がこの都を滅ぼし、家々が熱い灰に埋もれたとき、うず高い廃虚のなかから、見知らぬ鳥が舞いあがり、羽ばたく翼で灰を打った。悲しい鳴き声、やせ細ったからだ、青白さ、それに、滅んだ都に似つかわしいすべてのものが、この鳥のなかに残っていた。アルデアという町の名も、「蒼鷺」として残っている。おもえば、アルデアの都は、われとわが翼を打ちつけることでみずからを嘆いているのだ」

この神秘的で詩的な物語に登場するアオサギは、一面では自分を燃やして灰の中から自らを再生するフェニックスのイメージそのものである。しかし、このArdeaの町から飛び立つのはフェニックスではなくアオサギなのだ。Ardeaという町の名前がアオサギのラテン名だと分かれば、作者がいかに恣意的にアオサギとフェニックスのイメージを融合させようとしたかが分かる。

ただ、残念ながら、アオサギとフェニックスの邂逅はこれが最初で最後だった。このあと、両者は再び相まみえることなく、アオサギはより現実味のある生身のアオサギとして、フェニックスはより神秘的、伝説的な生き物として、それぞれ別の道を歩むことになるのである。

寿命の短かった生身のアオサギ

アオサギについては、それより少し前、といってもオヴィディウスより300年以上も前になるが、曇のないう目で詳細な観察を行った人物がいた。アリストテレスである。彼の著書のひとつ『動物誌』にはアオサギに関する記述がいくつか見られる。たとえば、次のような説明がある。「灰色のサギは巣についたり、交尾したりするのが困難である。すなわち、交尾しながら鳴き立て、「眼から血が出る」といわれ、(後略)」

交尾するのが困難かどうかはひとまず置くとして、注意したいのは交尾のとき「眼から血が出る」という記述である。これは虹彩が婚姻色を呈することを指していると考えられる。アオサギの虹彩は興奮の度合いが高まると赤くなる。この現象は必ずしも交尾時に限られるわけではないし、もちろん血を流しているわけでもない。しかし、注目すべきは、虹彩の色のわずかな変化をも見逃さない卓越した観察眼である。双眼鏡もなく肉眼で観察するしかなかった時代に、この観察の正確さにはまったく驚くほかない。

ともかく、アリストテレスにかかると、全てのものはありのままに観察され、白日のもとで客観的に分析、解釈される。もしかすると、当時の人々がアオサギに対し

で抱いたイメージは、今日、我々が抱くアオサギのイメージとそれほど違わなかったかもしれない。

しかし、そうした時代は長くは続かなかった。時代はやがてギリシャからローマへと移り、その後、キリスト教がヨーロッパ世界を席卷するようになると、アオサギには再び幾重もの文化的フィルターがかけられ、作為的なイメージだけが独り歩きするようになるのである。

Godがもたらしたもの

まずは、聖書に書かれたアオサギから見てみよう。旧約聖書の『レビ記』に次のような記述がある（『申命記』にもほぼ同様の記述あり）。

「鳥のうち、次のものは、あなたがたに忌むべきものとして、食べてはならない。それらは忌むべきものである。すなわち、はげわし、ひげはげわし、みさご、とび、はやぶさの類、もろもろのからすの類、だちょう、よたか、かもめ、たかの類、ふくろう、う、みみずく、むらさきばん、ペリカン、はげたか、こうのとりの、さぎの類、やつがしら、こうもり」

つまり、アオサギはユダヤ人たちにとっては厭わしい鳥だったのだ。ただし、これは飽くまで食を禁じるための戒律であって、これらの鳥そのものの本性が批判されているわけではない。実際、ここに挙げられた鳥のうち、ペリカンやヤツガシラなど、人々に行動規範を示す目的で、その習性が好意的に紹介されている鳥は多い。アオサギもそうした鳥の一種であった。もっとも、その手の話が書かれているのは聖書ではなく、『フィシオログス』や『ベストイアリ』といった庶民向けの寓話集である。これらの本はアリストテレスをはじめとした博物学の知見をキリスト教の教義に合うように都合よく説明したもので、聖書を別にすれば中世を通してもっとも広く読まれた書物とされている。この中では動物たちはどのように紹介されていたのか。『フィシオログス』におけるアオサギの項目から引用してみよう。なお、キリスト教の教訓が書かれた部分は省いた。

「この鳥は、数ある鳥の中でもとりわけ利口だ。巢はひとつ、ねぐらはひとつ、いくつもの休み場を求めない。いったん住みつくと、そこに止まり、そこで眠る。けっして死んだものを食べない。あちこち飛んでまわることもない。かれのねぐらも、かれのえさ場も、きまって同じだ」

冒頭の、サギが最も賢いという部分には異論のある人もいると思うが、他にも本当にサギのことを言っているのか疑いたくなる部分が多い。実際、別の版では同じ話がアオサギでなくオオバンの説明になったりするのだから始末に負えない。

古代エジプトでベヌウがフェニックスへ化けてしまったように、キリスト教の支配した当時の世界では、ある

動物がいつの間にかまったく別の動物に置き換えられるという例は多い。この時代は聖書をもとに文化がつけられているといっても過言ではないが、その元となるべき聖書（この場合は旧約聖書）が、どうも多くの間違いを



生み出しているようなのだ。もともとヘブライ語で書かれた聖書は、ギリシャ語やラテン語を経て、さらに英語や各国語に訳される。このため、翻訳のたびに誤訳の危険が付きまとう。まして、翻訳にたずさわる神学者は、鳥や動物などろくに知らない場合が多かっただろうし、聞いたこともない動物名が出てくれば、自分の知っている動物の名を適当に当てはめたであろうことは容易に想像できる。ただ、前にも書いたように文化とはそうしたものかもしれない。間違いが必ずしも悪い結果をもたらすとは限らない。ときには嘘から出た真のように、間違いは新たな考え方や物の見方を創造する契機となる可能性も秘めている。それはもしかしたら、生物のDNAの塩基配列にときに間違いが起こると同じで、文化の多様性と頑健性を増すためには必要なことなのかもしれない。

ところで、聖書では前述の『レビ記』、『申命記』以外にサギの登場する場面はない。ただ、間違っただけの鳥に書き換えられたと思われる箇所はある。詩篇104章17節に、「こうのとりはもみの木をそのすまいとする」という一節がある。ギリシャ語版ではコウノトリのところはHerodiiとなっているので、この部分は本来サギと訳すのが正しい。それが、英語や日本語に訳されるうちに勝手にコウノトリに化けてしまったのだ。まあこの程度の間違いはよくあることなのだろう。この一節はギリシャ語では“Herodii domus dux est eorum”と記される。どう訳すのが正しいのかは分からないが、少なくともここに使われている単語は、「サギ」、「家」、「彼らのリーダー」である。それがどうしたはずみか「こうのとりはもみの木をそのすまいとする」と訳されてしまうのだ。

しかし、この程度で驚いてはいけぬ。9世紀半ば、ベネディクト修道僧であったラバヌス・マウルスは、自

著『事物の本性について』の中で「サギは最も賢い鳥だ」と記している。それはまだいい。この本に記された動物の特性については前述の『フィシオログス』などが情報源となっているし、当時、サギが最も賢い鳥というのはたぶん常識だったのだろう。驚くのは先ほどの箇所解釈。彼はここをなんと「サギはキリストである」という意味に理解するのである。

西欧の意識に潜むアオサギ

そんな時代が1000年以上も続いた。その後、聖書や神学者の考えがアオサギのイメージを規定する時期はやがて終わりを告げる。しかし、記憶は永続する。当時のアオサギのイメージは現代においても彼らの文化におお脈々と受け継がれている。そして、その証拠を我々はそこかしこに見ることができるのだ。

そういえば、西洋のアオサギの系譜を語る上で、もうひとつ重要な要素があった。ドルイドのことである。キリスト教がヨーロッパ世界を席卷する以前、ガリアやブリテン諸島といったヨーロッパの大部分は、自然崇拜のケルト人たちの土地で占められ、その社会はドルイドと呼ばれる神官たちによって仕切られていた。そして、地方によっては、ドルイドたちはアオサギのイメージを自らに重ね合わせていたようなのだ。ドルイド僧は魔術を用いるとき、片方の手で片目を塞ぎ片足で立つ、いわゆる「サギのポーズ」と呼ばれる姿勢を用いていた。この姿勢をとることで意識を集中させパワーを集めることができたのだという。ともかく、彼らにとってアオサギは特別な存在だったのだ。

時代は下って、18世紀末から19世紀前半のアイランド。詩人であり劇作家でもあるW・B・イェイツは、多くの作品で頻繁にアオサギを登場させ、キリストやドルイドの内面をシンボリックに表現することに成功した。さらに、イェイツよりやや遅れて現れたウェールズの詩人、ディラン・トーマスは、自然の聖性のシンボルとしてアオサギをしばしば聖職者に例えている。彼らの作品は西洋のアオサギの文化史を見ていく上で記念碑的な作品群であり、今日なおその輝きは薄れていない。もしかすると、彼らにとってのアオサギは、単に文学上の表現にとどまらず、もっと意識の深い部分まで入り込んでいたのかもしれない。たとえば、ディラン・トーマスは彼の息子を授かったとき、その子にアオサギという名を与えているのである。

ダークサイドに生きる

それでは、日本のアオサギはどうであったか。まずは『万葉集』。4500首以上もの歌が収録されている言わずと知れた最古の歌集だが、サギを詠んだ歌は残念ながらただの一首もない。これはツルを詠んだ歌が45首もあること

を思うとやはり奇異な感じは否めない。つまり、万葉の歌人たちの感性も野付の観光客の感性も同じということだろうか。しかし、それではあまりに悲しい。では、『古事記』はどうか。こちらは天若日子の葬儀の場面ともう一ヶ所であらうじてサギが登場する。ただし、役割としてあまり重要でないのでここでは触れない。

平安時代になると、書物にサギが現れる頻度は次第に多くなっていく。『日本霊異記』もそのひとつ。ここでサギが登場するのは「観音の銅像と鷺の形と、奇しき表を示しし縁」というタイトルの話で、池の杭にとまっているサギを子供たちが捕まえようとしたところ、サギは水の中に沈み、サギがとまっていた杭がじつは観音様の銅像であったという内容である。単なる仏教の説話で、とくにサギに意味付けがなされているわけではない。しかし、私にはこの辺が、この国のサギのイメージをおどろおどろしいものへと変えたひとつの分岐点のような気がしてならないのだ。

同じく平安時代には『枕草子』が世に出てくる。おそらく、サギに対する個人の見方を明確に文章にしたのは清少納言が初めてだろう。そこには「鷺は、いとみめも見ぐるし。まなこみなども、うたてよろずになつかしからねど(後略)」とある。現代語に直すと、「鷺は見た目がとても醜い。目つきなども気味が悪いし、何かにつけてかわいくない」というようなことで、もう取り付く鳥もない。

そんなことで、日本のサギにはあまり良いイメージが定着しなかったようだ。江戸時代になると、このネガ



タイプな見方はますます顕著になる。そして、ついにアオサギは妖怪に貶められてしまうのである。前頁の絵は江戸中期に活躍した妖怪絵師、鳥山石燕が描いたもので、『画図百鬼夜行』にある「青鷺火」の図。松の木の向こうにおどろおどろしい光を放つ青鷺が見える。左端には「青鷺の年を経しハ夜飛ときハかならず其羽ひかるもの也 目の光に映じ嘴とがりてすさまじきと也」と書かれている。

悲しいことに、このアオサギのイメージは明治後も継承される。泉鏡花や夏目漱石など、小説に妖怪の雰囲気の色濃く残したアオサギを登場させた文人は多い。近いところでは京極夏彦の『姑獲鳥の夏』も挙げられよう。要するに、日本のアオサギは多分に負のイメージを背負ったまま現代に生き続けているのである。

もちろん、日本人のアオサギ観はこのようなものばかりではない。紫式部は『源氏物語』の中でアオサギの奥ゆかしさを認めているし、蕪村や子規のようにアオサギのたずまいをポジティブに表現した俳人、歌人も多い。蕪村の「夕風や 水青鷺の 脛を打つ」など、前述の鳥山石燕と同時代の句とは思われない澄んだ雰囲気がある。また、更科源蔵のように、アオサギに峻厳さや孤高といったイメージを読み取った詩人もいる。このように、日本のアオサギのイメージに様々なものがあるのは確かなのだ。けれども、日本のアオサギの文化的系譜を辿ったとき、そのイメージにもっとも影響したものが何かと問われれば、妖怪をはじめとしたダークサイドに生きるアオサギのイメージが否応なく大きく浮かび上がってくるのである。

八百万の神の国に暮らす

ここまで、ヨーロッパと日本におけるアオサギのイメージの変遷を簡単に見てきた。紹介の仕方に偏りはあるが、ともかく、西欧と日本のアオサギに対するイメージがかなり異なっているのは間違いないと思う。しかし、イメージというものが人々の行動にどれほどの影響をもつのかを考えたとき、しばしばその力に限界があるのを感じざるを得ない。たとえば、アオサギに良いイメージを抱いていたはずのヨーロッパの人々が、20世紀半ば、漁業に害を及ぼすというのでアオサギを徹底的に駆除してしまったのだ。その結果、ヨーロッパのアオサギは一時期、絶滅寸前になったのである。

それに比べると日本の状況はまだしも平穏に思える。ときに個人や小さなコミュニティが考えられないような暴挙に出ることはあるが、全体として見れば、そこそこの自制の効いたアオサギとの付き合いができてきているように思う。けれども、それは結果であって人々が積極的にそのような状況をつくりだしているとは言いがたい。こうしてみると、イメージの力というのは、状況の悪化を食

い止めることより、むしろ、良い状況をさらに盛り立てる場合により効力を発揮するものなのかもしれない。

このように書いてくると、なんだか日本のアオサギをとりまく状況をずいぶん悲観している感じがしないでもない。が、むしろ私は日本のアオサギには潜在的に素晴らしいイメージが与えられていると思うのである。仏教が日本に渡来する前、さらには万葉や記紀よりも前の時代、この国の人々にとってサギは特別な存在だったかもしれないのだ。

当時の日本は稲作を中心に社会が動き、その年の米のとれ具合が人々の最大の関心事であったはずである。そのような社会では、人々は田んぼの神様に豊作を祈願する。当時、田の神は一般に「サの神」と呼ばれており、この名は地方によっては現在もまだ残っている。サの神は毎年、田植えの季節になると山から里に降りてくる。時は五月（サツキ）、五月雨（サミダレ）の降る季節である。そこでは早乙女（サオトメ）たちが早苗（サナエ）を植えている。サの神が鎮座するのはもちろん桜（サクラ）の木。人々はこの木の下で豊作を祈って、サの神に酒（サケ）や魚（サカナ）を供えるのである。ここまでは一般によく知られた話。しかし、それならそこに鷺（サギ）がいて何の不思議があるだろう。サギはサの神の見守る田んぼに飛来する。サの神の御使として、あるいはサの神そのものとして飛来するのである。

かつて日本は八百万の神の住まう国だった。そして、おそらくは今でもそうなのだ。現在、この国は仏教や西洋の文化、思想など様々なフィルターがかかって見えにくくなっているけれども、じっと目を凝らせば、八百万の神々の国はいつでもそこにある、と私は思う。

「サの神の 田に来たるらし 鷺の声」 春鋤

サギが穀霊とされた昔があった。そのイメージは、日本人の意識の深層に、今なお静かに息づいている。



飛ぶものたち

写真家 中島宏章

キクガシラコウモリ、コキクガシラコウモリ、モモジロコウモリ、ドーベントンコウモリ、ホオヒゲコウモリ、ヒメホオヒゲコウモリ、カグヤコウモリ、ノレンコウモリ、アブラコウモリ、オオアブラコウモリ、キタクビワコウモリ、ヤマコウモリ、ヒメヒナコウモリ、ヒナコウモリ、チチブコウモリ、ウサギコウモリ、テングコウモリ、コテングコウモリ、オヒキコウモリ。これら19種が北海道に生息するコウモリ類である。コウモリのことを知らない人は、この種類数の多さに驚くことだろう。いや、そもそも北海道にコウモリが生息していること自体に驚いているかもしれない。かつての僕のように。

野鳥観察の歴史と観察者数の多さに比べ、コウモリを観察する人は非常に少ない。アマチュア活動の活発さがそのジャンルの発展度合いを示していると僕は思う。コウモリはまだまだである。

なぜコウモリを観察する人が少ないのか？それは、コウモリのことを紹介する機会がこれまでに少なかったことが本質的原因だろう。

僕は子供の頃から動物が好きで毎日動物図鑑を読みふけていた。中学生の頃になると一端の野鳥観察者とし



キタクビワコウモリの顔

てフィールドでは振舞っていた。物心ついた頃から僕の興味は野生動物へと注がれていた。だが、そこには、コウモリのごとは一切出てこない。野鳥や昆虫は出てきてもコウモリは絶対に出てこない。それはなぜか？コウモリのごとを紹介した本やテレビ番組、雑誌などが皆無だったからである。それに比べ、野鳥観察に関する情報はあった。僕は野鳥観察の魅力を知ることができたのは、そのためである。

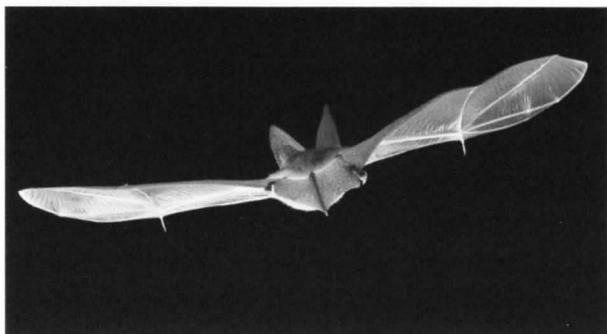
また、コウモリは夜行性であるため、観察が非常に難しいのもポイントである。僕が最近興味を持っている野鳥といえば、大抵が夜行性鳥類である。夜行性鳥類は生態が知られていないことが多い。夜行性だから観察が難しいのである。さらには、その観察対象が“小さい”となれば、さらに難易度は上がる。例えば、ヨタカが普段、どういった生活をしているのか、明確に述べることの出来る人はいないであろう。つまりは、そうゆうことである。コウモリはヨタカよりもさらに小さい。また、ヨタカの声は僕たちの耳に聞こえるが、コウモリの声は僕たちには聞こえない。コウモリの声は超音波だからである。お手上げである。

先日、「幻のへび」といわれるシロマダラの発見・捕獲を北海道で達成することが出来た。シロマダラというへびは夜行性で、アオダイショウなどとくらべて数段に小さい。とても小さい。僕たちが捕まえたシロマダラは体長40cmほどしかなかった。なぜ、これまでシロマダラが北海道で確認されてこなかったのか？考えてみるとすぐに分かると思う。そう、「夜行性」ということ「小さい」ということ、この2つのポイントである。

僕たち人間は、自分たちが見えている情報をもって、



ウサギコウモリの飛翔



飛翔するウサギコウモリ後姿

物事の判断をする。当たり前である。だが、見えていない部分もたくさんあるんだ、という事を忘れてはいけない。

「自然は球体である。地球がそうであるように、そこに暮らす我々人間も球体である。球体のすべてを知るには、上辺（うわべ）だけではなく、下から、裏から、後ろから見ることだ。」

自然を見る時に、一番してはいけないこと、それは偏見で見ることだと僕は思っている。これはコウモリから教わった。

僕たち人間は、超音波が聞こえない。それに、紫外線や赤外線を見ることができない。「だから、どうした」と思われるかもしれないが、他の動物達が人間と異なる感覚世界で生きているから、これは無視することはできない。

野鳥たちは「紫外線」が見えていることを皆さんご存知だろうか？ そして、その紫外線が野鳥たちにとって大切な「サイン」として役に立っているとしたら？

そのことを僕たち人間は見過ぎていたことになる。

一番わかり易い説明をしよう。カラスがいる。ハシブトガラス。このハシブトガラスのオスとメスを見分けることは、相当慣れた方でなければまずは無理だろう。ところが、紫外線でハシブトガラスを見てみると一目瞭然だというのだ。つまり、ハシブトガラスのオスの羽は、より多くの紫外線を反射しており、カラスから見れば、それはそれは「美しい」オスのカラスに見えるはずなのである。

また、チョウゲンボウなどは、この紫外線を見て、一番新しいネズミの通り道を探し出し、狩りの手がかりにしているという。そんなことは、紫外線が見えない僕たちには到底できない芸当だ。

僕たち人間が見ている世界は一部であって、全てではないのだ。そのことをコウモリが教えてくれた。そういった事を頭に入れて、再び自然観察へと繰り出すと、今までとは全く違った世界が目の前に広がる。

コテングコウモリというコウモリがいる。このコウモリがとにかく破天荒で、僕たちの予想の範疇の外で生きているコウモリである。彼らの寝床が特徴的だ。1つは、枯れ葉の中。もう1つは雪の中である。

どんな枯れ葉を利用するのかというと、長さが20cm程度あれば良い。オオイタドリ、ヤマブドウ、ホオノキ、ミズナラ、トチノキ、フキ、ヨブスマソウ、オニシモツケ、ウドなどが多い。北海道どこでもこの習性は見られるし、札幌市内でだってみられる。しかし、僕たちはそのことを全く知らなかったのである。

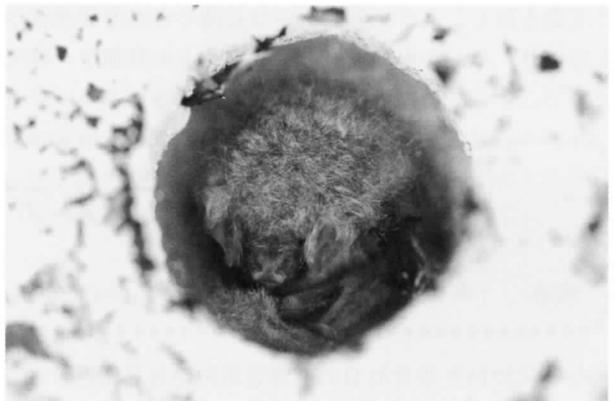
雪の中で眠るとはどういったことか。写真を見ていただきたい。まさに、雪の中で寝ているのがわかるだろう。



枯れ葉の中のコテングコウモリ



枯れ葉の中のコテングコウモリ顔



雪の中のコテングコウモリ

雪の中で眠るコテングコウモリの確認事例は全国で15例ほどある。そのうちの2例が札幌で確認されている。そのうちの1例が僕が確認した札幌市手稲山での確認である。写真もその時のものだ。雪の中で眠るコウモリの確認は、散歩している人や登山者などが偶然に見つける事例が多いので、読者の皆さんも見つけることがあるかもしれない。そうすれば、それは超レアな確認事例としてうけとっていただきたい。とても貴重なデータとなるかもしれない。

コウモリも観察者数が増えて、もっと新たなことが分かってくると、もっともっと面白い世界になるのだと思う。野鳥観察へ赴くみなさん。コウモリの存在も頭の片隅に入れて自然へ出ると、また違った感覚を味わうことが出来ますよ。

ムネアカタヒバリ

札幌市東区 大橋 晃

私が利尻・礼文の探鳥に行くようになったのは、2006年の当会のゴールデンウイークの宿泊探鳥会の記録を見たことがきっかけでした。ヤツガシラ、コマドリ、ジョウビタキなど多数の旅鳥・夏鳥、それに稚内利尻航路のハシボソミズナギドリの大群など、目を見張るものでした。

「連休は鳥に限る」・・・翌年からそれまでの天売・焼尻と毎年交互にゴールデンウイークの鳥通いが始まりました。毎年ヤツガシラやコマドリ、ルリビタキ、ケリなど楽しませてもらっていましたが、去年は脚のケガで春から夏のベストシーズンを棒に振ってしまいました。

今年は去年の分も取り返そうと、東日本大震災や原発事故で被災されている方々には申し訳ないと思いつつ出かけたのですが、4月の末にかなりの雪も降ったとのことで、夏鳥はさっぱり。

いつも美声を響かせている利尻名物のコマドリは、森林公園でも姫沼でも全く声なし。地元の方の話では、バンディングでコマドリが1羽もかかってないとのこと。礼文島も同じような状態で、いつも見ていたヤツガシラも空振り。そんな中で唯一といってもよい収穫が、利尻

島岬公園のムネアカタヒバリでした。

夕方薄暗くなってから、草の上で盛んに餌をとる7-8羽の一群を発見。最初タヒバリかと思いましたが、よく見ると顔から胸にかけて赤みの目立つものが何羽かおり、背の縦斑がはっきりして、ムネアカタヒバリと判断しました。

北海道ではまれな旅鳥とされていますが、少し元気を取り戻した出会いでした。



ムネアカタヒバリ 2011. 5. 3 利尻町

恵庭市でアカアシチョウゲンボウ

広報部

今年(2011)5月31日の北海道新聞朝刊(札幌圏)に恵庭市で見られたアカアシチョウゲンボウの記事が写真付きで掲載されました。観察・写真撮影者である北広島



アカアシチョウゲンボウ 2011. 5. 22 恵庭市漁太

市在住の山本克博さん(酪農学園大学教授)から改めて観察状況を聞くとともに、新聞のものとは別の写真の提供もいただきましたので紹介します。

観察日時は2011年5月22日の10:50から12:15までの間、場所は恵庭市漁太で周辺は畑と田んぼの農耕地ということです。車で走行中、電線に止まっている当該個体を発見し、止まっている姿、飛び立って上空を飛翔する姿を観察・写真撮影しました。新聞に掲載された止まっている写真、および今回掲載の飛翔写真(白黒ですが元写真はカラー)では、体下面の少し青味を帯びた灰色、下腹と下尾筒の赤褐色、足の赤、翼下面の白と風切の黒が明瞭で、アカアシチョウゲンボウの雄の特徴がよく現れています。

この個体は1時間半ほどその場所に留まっていた後、やがて遠くに飛んでいったとのことですが、その間、電線に止まったり、畑に降り立ったり、飛翔したりを繰り返

返し、時には羽をすばめて急降下というような場面もあったそうです。掲載の飛翔中写真では何かを銜えているように見えます。

北海道でのアカアシチョウゲンボウの記録は、公表・未公表合わせて十数例を超える程度と思われます。記録として残されている最初は1985年6月の根室でのものです。その後の記録の多くは北海道鳥類目録改訂3版(藤巻, 2010, 極東鳥類研究会、美唄)に記載されており、ここ2, 3年では以下があります。

2009年6月1日、根室(北海道新聞2009年6月5日)

2010年5月2~4日、礼文島(富川徹会員が当会野鳥写真展などに発表)

2011年5月22日、恵庭市漁太(今回の記録)

2011年5月24日、天売島(北海道海鳥センターブログ「海鳥日記」2011. 6. 14、先崎理之さん確認)

2011年6月1日、羽幌町(北海道海鳥センターブログ「海鳥日記」2011. 6. 14、黒田弘章さん撮影)

全部の記録の詳細は省きますが、出現地域の特異性は見られず、また雌雄の偏りもないようです。ただ、記録のすべては5月と6月になっています。中国東北部や朝鮮半島で繁殖し、アフリカ南部で越冬する鳥ですから、北海道への飛来は迷行と考えられます。ただ本州以西では秋季の記録もありますから、日本全体としては数少ない旅鳥という見かたがなされているようです。



名古屋から
野幌探鳥会に
参加して

2011. 5. 8

名古屋市 建部 直子

皆さん有り難うございました！お陰様で貴重な体験が出来ました。まず集合地点で、もうかなりの種類の鳥の音がしていたことに驚きました。名古屋周辺の探鳥会でそんなことがあれば、歩き出さずに鳴き声から鳥を割り出し、みんなで5分以上は探すでしょう…。野幌では皆さん気にとめる様子もなく、すたすたと行かれましたので、やはり鳥の数が違うのか…と期待して進みました。

同行した息子の感想は以下の通りです。

『北海道では、本州で見られないハシブトガラ、ヤマゲラ、シロハラゴジュウカラ、エゾフクロウ、エゾアカゲラ等が見られて良かったです。ありがとうございました。また北海道に行って今度はクマガラ、エゾオオアカゲラ、シマエナガ、シマアオジ、ワタリガラス、コオリガモ、エゾセンニュウ、シマセンニュウが見たいです。』

あと何度訪れればこれだけ観られるのか、という感じですが…。エゾオオアカゲラは二度出たのを、タイミングがあわず観られませんでした。

我が家はゴールデンウィークに通常遠出をしません、今年はずいぶん軽度知的障害のある息子が、私の実家に行くのも震災の影響でやめになりましたので、彼の好きな鳥見に出向くことにしました(主人は鳥見に興味がなく、大阪へ)。

しかし準備期間がなかったため、鳥見の場所を探すよりも旭山動物園のバック利用で円山動物園と2日間過ごし、3日目は街でも観て帰る考えでしたが、鳥見歴も長く知識もかなり持っている息子としては、他に公園などで亜種や固有種を観ないと物足りない、と言います。結局私の出番になり、探鳥地をネット検索しているうちに、

息子がもっとも満足できそうな野幌森林公園を発見、そこから皆さんの探鳥会を発見、となった次第です。

北海道は初めてでしたし、貴会の様子も分からないのでわずかな不安もありましたが、着いた途端それも消えました。不思議というか、逆に当然なのかもしれませんが、愛鳥家の皆さんには全国共通の穏やかな雰囲気があるようで、名古屋と場所が変わった気がしませんでした。息子がときどき妙に声が大きかったりすることがあるのですが、それも含めて受け入れてくださるのも同様です。自閉症という理解が難しい障害があると、滞在しづらい公共の場も多くありますので、有り難いことです。

息子が期待し、観ることが出来たキツキ類やカラ類は、愛知ではほとんど観ることが出来ません。正確には声は聞こえても、姿は一瞬遠目や頭上で、というのが多く、あの感じはアカゲラ、のようになりがちです。もちろんゴジュウカラは高山でないと観られませんので、森林公園とはいえあれほどいるのが新鮮でした。伺ったお話で、名古屋の我が家に毎年来てくれるジョウビタキが、北海道ではほとんど観られないなど、興味深いものがありました。また、会の序盤で息子と、ダイサギが頭上を飛んでいくのを観たのですが、名古屋では普通ですが北海道ではダイサギは珍しいそうなので、貴重な場面に居合せて良かったです。

会が終了してから、フクロウがいるとわざわざ教えていただき、息子の満足度もさらにアップしていました。帰りも、バス停に向かっていたら会の方に拾っていただき、帰りの飛行機まで余裕も出来ましたので、お土産の買い足しもできました。月寒ジンギスカンと回転寿司トリトン以外は時計台も北大も観ず、鳥見のみで終わるところでしたので、有り難かったです。

北海道には探鳥地が多彩にありますから、また訪れることが出来るといいですが(なかなか難しいかもしれませんが)、機会がありましたら宜しく願ひ致します。

【記録された鳥】カイツブリ、ダイサギ、トビ、オオタカ、ノスリ、マガモ、コガモ、カルガモ、ホシハジロ、キン

クロハジロ、キジバト、ツツドリ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ミソサザイ、コマドリ、クログミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、ククイタダキ、コサメビタキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、ニューナイスズメ、ハシブトガラス
以上36種

【参加者】阿部真美、井上公雄、井上詳子、今村三枝子、内山英晋、栗林宏三、後藤義民、小西美美枝、小山久一、坂井伍一、坂口賢治・幸子、品川睦生、高田征男、高橋照子、竹田芳範、建部直子・孝太、田中 陽・雅子、辻雅司・方子、戸津高保、中正憲佑・弘子、成澤里美、長谷川 功・伊都子、畑 正輔、浜野チエ子、早坂泰夫、原田功雄、辺見敦子、松原寛直・敏子、横山加奈子
以上36名

【担当幹事】早坂泰夫、松原寛直

千 歳 川

2011. 5. 15

函館市 菊池るり子

以前から来てみたかった千歳川で探鳥会があると知り参加させていただきました。

橋を渡って歩き始めましたが、気温が低いせいかさえずりがあまり聞こえてきません。しばらく歩くとカラ類、センダイムシクイ、コサメビタキやアオジが木々の間から姿を見せてくれました。足元にはニリンソウやエンレイソウ等春の花が咲き揃っています。感心したのはカツラの芽吹きで、生れたばかりのアズキ色から薄緑色にハート形を広げたものまで様々できれいでした。普段は入れないダムへ上がらせていただき満開の桜を愛でながら昼食。ここで今日のハイライトと言うべきでしょうか、イカルが3羽出ました。鮮やかな黄の嘴や肌色の脚をこんなにじっくり観察したのは初めてでした。

孵化場そばではカワセミが腹のオレンジ背の青と全身を見せてくれました。暖くなるとさえずりも多く聞こえてきます。良い声のさえずりがキビタキなのかクログミなのか私には識別できないのが何とも残念です。

千歳川といえばヤマセミですが今回は釣り人の姿があったせいか声も姿も現れませんでした。少し前から禁漁ではなくなったと聞きました。私の住む汐泊川やユーラップ川にもヤマセミが居るとされ私もチラリと姿を見た事はありますが、どちらも禁漁河川として守られています。水量豊かにどうどうと流れ自然のままに護岸されていない千歳川はこのまま残ってほしい、そして清流にしか棲まないといわれる希少種ヤマセミもいつまでも居て欲しいと願うばかりです。

森の中を歩き鳥の声に耳を澄ましさわやかな空気を吸いリフレッシュできました。幹事さんはじめ会員さんに

は親切に教えていただきました。有難うございました。

【記録された鳥】トビ、ミサゴ、ハイタカ、キンクロハジロ、ウミネコ、キジバト、ツツドリ、アマツバメ、カワセミ、アカゲラ、コゲラ、ヤマゲラ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、カワガラス、クログミ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、ククイタダキ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、ハシブトガラス
以上38種

【参加者】伊藤まさ子、井上詳子、今村三枝子、岩崎正美、岩崎和子、内山英晋、川東保憲・知子、菊池るり子、北川博一、栗林宏三、後藤義民、小山久一、佐賀俊三、佐賀チエ子、白澤昌彦・瑠美子、高橋良直、竹田芳範、辻雅司、徳田恵美、戸津高保、畑 正輔、原 美保、樋口孝城、広木朋子、松原寛直・敏子、村木敬太郎、山本和昭、横山加奈子、吉田慶子、吉田貴子
以上33名

【担当幹事】栗林宏三、白澤昌彦

鷓 川 河 口

2011. 5. 22

【記録された鳥】アオサギ、トビ、オジロワシ、ヒドリガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、スズガモ、キジ、オオソリハシシギ、ホウロクシギ、イソシギ、キアシシギ、オオジシギ、トウネン、ハマシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ユリカモメ、キジバト、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス
以上34種

【参加者】石神直登・美代子、井上詳子、内山純一・雅子、川東保憲・知子、門村徳男、岸谷美恵子、栗林宏三、後藤義民、斉藤泰代、品川睦生、島田芳郎・陽子、高橋良直、辻 雅司・方子、中正憲佑・弘子、中田勝義、畑 正輔、樋口孝城、山田千代、吉中宏太郎・久子、鷲田善幸
以上27名

【担当幹事】門村徳男、樋口孝城

植 苗 ウ ト ナ イ

2011. 5. 29

札幌市北区 高橋 照子

北海道野鳥愛護会を知ったのは、カメラクラブの人を介してのことでした。私の住んでいるあいの里は元々鳥が多く、犬の散歩の時は小鳥のさえずりを聞きながら、日々楽しんでいました。その愛犬が昨年の夏に死んでしまい、それ以来犬の散歩コースを歩くことが出来なくなってしまいました。それでも鳥のさえずりがだんだん楽しくなり、

この会に参加させてもらいました。皆様大変鳥好きで、正直驚いています。山の小道を鳥のさえずりを聞きながら歩くのは気持ちよく、家に帰った後、心地よい疲労感で心が癒されます。色々雑用で忙しい毎日ですが、野鳥の会は続けていきたいので、無理せず、ゆったりとマイペースで参加させていただきたいと思います。今後とも宜しくお願い致します。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、マガモ、オオジシギ、クロハラアジサシ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、ヒヨドリ、ノゴマ、ノビタキ、クロツグミ、ウグイス、コヨシキリ、センダイムシクイ、キビタキ、コサメビタキ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、シメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上31種

【参加者】阿部真美、今村三枝子、後木健一、川東保憲・知子、谷口勇五郎、後藤義民、小西峰夫・芙美枝、小山久一、佐藤幹夫、佐藤貞子、高橋照子、高橋良直、田中陽・雅子、田仲利恵子、辻 雅司・方子、照井トミ子、戸津高保・以知子、畑 正輔、樋口孝城、丸島道子、村田睦子、山上正一、山本昌子、横山加奈子、鷺田善幸

以上30名

【担当幹事】田中 陽、鷺田善幸

平和の滝

2011. 6. 4

岩内郡共和町 岩井 茂

今回を含めて、四年ほど前から毎年夜の探鳥会に参加している。ここ最近仕事の事情で、当会の午前中の探鳥会に参加できないが、それでも夜の探鳥会は時間がとれるので、気軽に参加しやすい。

必ずと言っていいほど、当日が雨が晴天のどちらかで、晴れた日は星の輝きが、都会で見るとより美しく感じる。また、雨には雨の風情があり、夜の森や山の静けさを一層引き立てている。当日夕方からぼつぼつと雨が降り出し、初参加の知人は探鳥会の開催を気にしていたが、虫よけスプレーや懐中電灯の用意もさることながら、ただ山中の寒さを考えての対策も抜かりなかった。

さて現地の平和の滝駐車場に集合する。案内役の幹事含めて10名の参加で、足元のぬかるみを気にしつつ、目的地まで野鳥の声を探し歩く。雨が激しくなっていく中で、まず初めに聴いたのはアオジだった。山道を進むうちに、クロツグミやアカハラの声が聞こえてくる。森の奥へと進むうちに雨が自然と止みだしたが、オオルリ、キビタキ、センダイムシクイがかすかに聞こえた。だんだん霧が行く手を遮るかのようになり、ゆっくりとした足取りで目的地に着いた。

目的地にしばし休むが、山の中とは言えまだ暮れきつ

ていない。更けるのを待ちながら、周囲を見渡し注意深く耳を澄ませる。寒さ対策は万全だったものの、野鳥の声は時折かすかに聞こえるヤマシギのみだった。毎年楽しみにしているコノハズクやジュウイチは今年来なかった。霧越しに瀬音のみ聞こえたが、不意にヤマシギが我々の目の前を低空飛行して過ぎて行った。一瞬だけでもヤマシギの姿を見られたのは幸いであった。

結局成果は乏しかったものの、ヤマシギの姿だけでも見られたのは、数少ない収穫と言える。帰路に野鳥の声を楽しみにしていたが、瀬音のみ聞こえるのみでいささか寂しい夜の探鳥会だった。今年は雨だけでなく寒さのせいで、多くの野鳥を観察できなかったのが残念だったが、もし都合が合えば来年も参加したい。

【記録された鳥】ヤマシギ、ヒヨドリ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、アオジ、ハシボソガラス

以上10種

【参加者】伊藤純子、岩井 茂、上村淳子・俊太・ゆきの、及川 澄、岡本健太郎、白澤昌彦、竹田芳範、戸津高保

以上10名

【担当幹事】白澤昌彦、戸津高保

東米里 (川下公園・厚別川)

2011. 6. 12

札幌市南区 品川 睦生

今まで行っていた東米里探鳥会は集合場所にしていました東米里小学校が今年3月31日に閉鎖されたので、今年は新しい集合場所として川下公園の駐車場になり、また歩く場所が厚別川の堤防上になりました。今回初めての探鳥コースなので幹事として一寸心配でしたが事前のPRで集合場所に多くの皆さんに集まっていただき安心しました。また集合場所ではアオジがしきりに囀り皆さんを歓迎していました。

厚別川の堤防上を歩いたのですが河川敷の草原にはオオヨシキリ・コヨシキリ・ノビタキ・ホオアカなどの草原の鳥が囀りまた虫などの餌を運ぶ姿を見ることが出来ました。オオジシギが上空を飛ぶ姿と地上にいる姿も見ることが出来ました。またカッコウが鳴き飛ぶ姿も見え夏の草原を探鳥するのに絶好の場所でした。出現した鳥は34種で例年に比べ約10種も多く見ることが出来ました。また来年もこの場所で探鳥会を行いたいと思いました。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、タカsp.、マガモ、コチドリ、イソシギ、オオジシギ、キジバト、アオバト、カッコウ、アリスイ、アカゲラ、ヒバリ、イワツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノビタキ、クロツグミ、アカハラ、エゾセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、シジュウカラ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、シメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシブトガラス

以上34種

【参加者】秋山洋子、阿部真美、井上公雄、井上詳子、今村三枝子、栄田吉子、大表順子、太田敏枝、岡本健太郎、川東保憲・知子、後藤義民、小堀煌治、品川睦生、杉田範男、高橋きよ子、高橋利通、高橋良直、田川 実・ひろ子、竹田芳範、竹永雅子、田中 陽・雅子、辻 雅司・方子、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、野田貴代子、本間康裕、畑 正輔、浜野チエ子、早坂泰夫、樋口孝城、松原寛直・敏子、横山加奈子、吉中宏太郎・久子

以上41名

【担当幹事】品川睦生、戸津高保

野幌森林公園

2011. 6. 19

【記録された鳥】トビ、オシドリ、オオバン、キジバト、アオバト、ツツドリ、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、クログミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、キバシリ、アオジ、カワラヒワ、イカル、ニュウナイスズメ、ハシブトガラス

以上24種

【参加者】秋山洋子、伊藤信治、井上公雄、今村三枝子、岡本健太郎、川村宣子、栗林宏三、沢田浩一、品川睦生、佐藤美栄子、土屋和美、戸津高保、中村 隆、畑 正輔、早坂泰夫、樋口孝城・陽子、広木朋子、辺見敦子、本間康裕、松原寛直・敏子、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子

以上25名

【担当幹事】栗林宏三、横山加奈子

福 移

2011. 6. 26

福移小中学校教頭 淡路 尚広

図鑑を片手に、双眼鏡の中の鳥を見分けることの面白さを知り、「趣味はバードウォッチング」と言うようになってからそれなりの時間がたちました。日本野鳥の会や北海道野鳥愛護会のことも知り、一度は探鳥会というものに参加したいと思いつつも、仕事に追われたり朝起きが苦手だったり、それはなかなか実現できませんでした。昨年赴任したここ福移小中学校は自然に恵まれさまざまな野鳥が飛び交う、鳥好きにはたまらないところです。ゆっくりと野鳥を観察したいと思いつつも多忙な日々が続き、それはなかなか実現できませんでした。そんな中、この学校が当会の探鳥会の拠点となっていたことは、願ってもない機会でした。初めての昨年は、途中までの参加でしたが、今年は最後までご一緒することができ、とても楽しい時間を共有させていただきました。

当日は晴天でありながら気温も暑からず寒からず、その上風も弱いという探鳥には絶好のコンディション。集まってきたみなさんは、車を降りると同時に双眼鏡や

フィールドスコープを用意して観察を始めたのはさすがと感心しました。学校から石狩川の堤防では、トビ、ムクドリ、シジュウカラ、ノビタキ、ホオアカ、オオジュリンなど、日頃からよく登場する野鳥たちが観察された他、姿は見ることはできませんでしたがエゾセンニュウやカッコウの声もしっかりと聞こえていました。豊平川と石狩川の合流する付近では、カワセミ、ノゴマ、ベニマシコなど比較的珍しい鳥にも出会えた他、オジロワシの飛翔姿も目にすることができました。そして、戻ってきた校庭にはキジ（コウライキジ）が登場し、探鳥会は最後の最後まで盛り上がりを見せました。

一人の観察では、図鑑だけがたよりで、その名前に自信が持てなかったり、よく分からないことがしばしばありますが、探鳥会では、そんな時にみなさんに尋ねることができたり、鳥談義になったり、情報交換ができたりと一人では味わえない楽しさがあります。そして、なによりたくさん目の観察するので、多くの、そして普段あまりお目にかかれなような野鳥たちに出会える確率がずっと高くなります。新しい鳥たちとの出会いを求め、今度は、他の地域での探鳥会にも参加したいと思います。ありがとうございました。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、オジロワシ、チュウビ、マガモ、キジ、キジバト、カッコウ、カワセミ、アリスイ、アカゲラ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、ウグイス、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、コヨシキリ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、コムドリ、ムクドリ、ハシボソガラス

以上32種

【参加者】秋山洋子、阿部真美、淡路尚広、五十嵐優幸、井上公雄、井上詳子、今村三枝子、岩崎孝博、栄田吉子、大表順子、大島 武、太田敏枝、川東保憲・知子、北川博一、栗林宏三、後藤義民、坂井伍一、沢田浩一、品川睦生、竹田芳範、田中 陽・雅子、田辺 至、辻 雅司・方子、徳田恵美、戸津高保、中正憲信・弘子、長田秀行、成澤里美、野田貴代子、早坂泰夫、畑 正輔、原 美保、松原寛直・敏子、山本和昭、横山加奈子

以上40名

【担当幹事】田中 陽、早坂泰夫

根室宿泊探鳥会

2011. 7. 2～3

札幌市東区 北川 博一

7月2日、3日の根室宿泊探鳥会に参加させていただきました。鳥を観るようになって2年弱の私にとって最も遠い鳥見旅行です。まだ見たことのないエトピリカやケイマフリを見られるかもしれないと、数週間前からわくわくしていました。

当日は朝7時に集合、長い旅路のスタートです。最初

の探鳥地に到着したのが午後3時頃、道の駅スワン44です。遠くではありませんが、タンチョウの成鳥3羽、ヒナ1羽、それとエゾシカも観ることができました。次に春国岱。バスを降りてすぐに迎えてくれたのがアカゲラのヒナ。大きな声で絶え間なく鳴き続けていました。巣穴から顔を出し親鳥を待っていましたところ、親鳥が帰宅。エサを与える様子も観ることができ、ほのぼのとした気分です。遊歩道に向かいました。遊歩道では、タンチョウがすぐ近くまで飛んで来てくれ、その優雅な飛翔を堪能できました。天気も良く、疲れも吹っ飛ばす気分です。宿泊先の海陽亭に向かいました。

夕食も花咲ガニ、和牛ステーキ共に美味しく、なんてコストパフォーマンスの高い旅行だろうと、幹事の方の力量に感謝の思いでした。夜は鳥談議に花を咲かせ、初心者の方にとって、ありがたい勉強の場となりました。

さて、翌日は朝5時に早朝散歩の探鳥。ほとんどの方が集まり、本当に皆さん鳥が好きなのだと思われました。

朝食の後、今回の宿泊探鳥会のメインイベント『落石ネイチャークルーズ』です。

天気も上々、いざエトピリカ!! の思いでホテルを出発。ところが港に着くと海霧がかかっています。船長が今シーズン100%エトピリカに会えていますよ、と話されていましたが海霧で見えないのではと、不安が過ぎりました。4隻に別れ出港。期待と不安で胸がいっぱいです。間もなくウトウが現れました。私にとっては初見です。海霧が濃いものなんとか観れ、写真に収めることができました。さらに進むとミズナギドリの群れです。ハイイロミズナギドリ、ハシボソミズナギドリの大群です。アリュージャンマジックには敵わないものの、凄い迫力です。次々に海面を走り飛び立ちます。どなたかがド

キュメンタリーを見ているみたいだと話されていました。

そして、エトピリカのエリアに到着。30分ほど待つようです。しかし、ケイマフリが遠めに現れてくれただけでエトピリカは現れてくれません。30分経過して、船長が『戻ります…』と、悲しいお知らせです。船上に重苦しい雰囲気が漂いました。しかし鳥の神様が私たちを見捨てませんでした。戻り始めてすぐに『あっ! エトピリカ!!』の声。ようやく飛んでいるエトピリカに会えました。さらに、比較的近くに海面に漂うエトピリカ。船長が喜びでいっぱいです。その上、ケイマフリも近くに来てくれました。4隻どのグループもエトピリカに会えたようです。その上、オオハム、フルマカモメ、コアホウドリ、ウミガラスに会えた船もありました。

延べ40時間の探鳥会となり、バスに揺られている時間が長く疲れましたが、成果は上々。楽しい思い出がいっぱいの探鳥会になりました。幹事の方々お疲れ様でした。そしてありがとうございました。

【記録された鳥】

(春国岱 7.2) ダイサギ、アオサギ、トビ、オジロワシ、マガモ、スズガモ、タンチョウ、オオセグロカモメ、カッコウ、ハリオアマツバメ、アマツバメ、アカゲラ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、モズ、ノゴマ、ウグイス、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、コヨシキリ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上27種

(落石クルーズ 7.3) オオハム、コアホウドリ、フルマカモメ、ハイイロミズナギドリ、ハシボソミズナギドリ、ウミウ、ヒメウ、ウミネコ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ウミガラス、ケイマフリ、ウトウ、エトピリカ、アマツバメ

以上15種



根室宿泊探鳥会 2011. 7. 3 落石港

【参加者】赤沼礼子、石橋和子、井上詳子、今村三枝子、大表順子、岸谷美恵子、北川博一、栗林宏三、小堀煌治、坂井伍一・俊子、佐々木 裕、品川睦生、志田博明、洪井節子、島田芳郎・陽子、清水朋子、高田征男、高橋きよ子、高橋良直、立田節子、田中志司子、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、西川喜久世、西尾京子、温井日出夫、畑 正輔、浜野チエ子、濱野由美子、早坂泰夫・みどり、原 美保、松原寛直・敏子、道川富美子、村上茂夫、山田登志恵、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子 以上44名

【担当幹事】栗林宏三、佐々木 裕、清水朋子、高橋良直、戸津高保



【宮島沼】 2011年10月2日(日)

宮島沼は、ユーラシア大陸の北東地域で繁殖を終えて夏を過ごしたマガンの秋の渡りの中継地として重要な場所です。例年9月下旬頃から渡

来が始まり、この時期にピークを迎

えます。マガンの他にも、ハクチョウ類、カモ類、カイツブリ類なども見られます。少数ですがシギ類も見られることがあります。時として猛禽類が上空を飛び、水面の鳥たちが一斉にざわめくのも見ものの一つです。湖畔から沼を見るだけで、移動はありません。午前11時半頃に鳥合わせをし、自由解散となります。天気良ければ隣の駐車場横でお弁当を広げることできます。

集 合：湖畔 午前10時

交 通：岩見沢駅前ターミナル発又はJR石狩月形駅前発
中央バス(月形行又は岩見沢行)
大富農協前下車 徒歩10分

【野幌森林公園】2011年10月9日(日)、11月6日(日)、
12月4日(日)

初秋から晩秋の野幌森林公園を楽しみます。夏鳥たちはほとんど渡去し、カラ類やキツキ類などの留鳥が主体となりますが、初冬といってもいい12月初めにはツグミやマヒワなどの冬鳥も見られます。木の実を食べるエゾリスの愛らしい姿も見られるかもしれません。大沢園地で昼食、午後1時半頃に大沢口に戻り、鳥合わせ、解散となります。

集 合：野幌森林公園大沢口 午前9時

交 通：新札幌駅ターミナル発
夕鉄バス(文京通西行)大沢口入り口下車
JRバス(文京台循環線)文京台南町下車
各徒歩5分

【ウトナイ湖】 2011年11月13日(日)

冬を間近にし、湖面にはこれから南へ向かったり、近郊で越冬したりするハクチョウ類、オナガガモ、ヒドリガモ、カワアイサなどのカモ類が浮かんでいます。マガンやシクイも見られます。オジロワシが対岸の木にとまっているかもしれません。湖岸をサンクチュアリのセンターまで歩きます。鳥の出具合にもよりますが、正午頃にセンター内で鳥合わせをし、解散となりますが、センター内で持参の昼食をみんなでというのがいつものパターンです。

集 合：鳥獣保護センター前 午前9時30分

交 通：千歳空港発道南バス苫小牧行
ウトナイ湖下車 徒歩1分

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り行います。

☆昼食、雨具、筆記用具をお持ち下さい。

☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-251-5465

午前10時～午後4時(土・日祭日を除く)

鳥民だより

◆野鳥カレンダーの販売◆

今年も「北海道野鳥愛護会」の名前の入ったカレンダーを販売いたします。価格は1部1,200円です。早めにお申し込みください。

お渡しは11月のウトナイ湖探鳥会と、12月の野幌森林公園探鳥会になりますので、必ずお受け取りください。申し込み時に受け取り場所もお知らせください。

申し込み先 品川 011-571-6915
小堀 011-591-2836

【新しく会員になられた方々】

荒川 聖子 (札幌市手稲区)
高橋 照子 (札幌市北区)
佐藤 貞子 (札幌市中央区)
田仲 利恵子 (札幌市南区)
秋山 洋子 (札幌市白石区)
上村 俊一・淳子・俊太・優貴乃 (札幌市手稲区)
本間 康裕・洋子 (札幌市中央区)
小原 幸子 (札幌市北区)

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>